

第10回野菜需給協議会（概要版）

1 日時：平成22年7月14日（水） 10:00～12:00

2 場所：農畜産業振興機構 北館6階 大会議室

3 議事概要

(1) 22年産春野菜の需給・価格の状況

ア 事務局から、資料1-1「22年産春野菜の需給・価格の実績」により、前回の協議会に提示した「22年産春野菜の需給・価格の見通し」と実績の比較及び要因を説明。

- ・ 「春キャベツ」の入荷量については、4月の天候不順等の影響で大幅に入荷減となったが、5月の好天により生育が回復したことにより、全体としては前年をわずかに下回った。

価格は、天候不順の影響により前年をかなり上回った。

- ・ 「たまねぎ」の入荷量については、4月は昨年北海道の貯蔵物が不作であったこと、佐賀県産を中心に低温の影響を受けたこともあり、かなり入荷減になった。その後天候の回復により順調になったが、全体としては前年をやや下回った。

価格は、天候不順や小玉傾向の影響により、前年をかなり上回った。

イ 事務局から、資料1-2「この春の気象と野菜価格について」により、気象による野菜価格への影響について、特徴のある品目について説明。

- ・ 「キャベツ」については、年明け以降著しい寒波が波状的に押し寄せ、神奈川県産の産出が遅れたため、入荷量は全体として前年より大幅に減少した。価格もそれに伴い高騰した。5月以降は入荷が回復し、それに伴い価格も落ち着いた。
- ・ 「だいこん」については、主産地の千葉が気候の影響を受け、4月は出荷が遅れた。価格は、千葉県の出荷状況に応じ、4月は前年に比べ高値、出荷回復をしたそれ以降は低下した。
- ・ 「レタス」については、4月は著しい寒波の影響で出荷が遅れ、入荷量は昨年より大幅に減少した。

ウ 事務局から、資料1-3「野菜需給協議会幹事会（4月16日開催）の報告」により今春に開催された野菜需給協議会幹事会について説明。

- ・ 4月の寒波等の影響により価格が急騰した。それを受け野菜需給協議会幹事会を

開催した。

- ・ 幹事会を開催した上で、農林水産省、全農と機構も連携し、様々な対策を講じた。

エ 全国農業協同組合連合会から、資料 1-4 「春野菜の価格高騰に対する取り組みについて」に、4月の幹事会の内容を踏まえた取り組みについて説明。

- ・ 4月20日に春キャベツとたまねぎの2品目について、前倒し出荷の需給調整事業を計画した。
- ・ はくさい、レタス、だいこん、ねぎ、きゅうりについては、補助事業としては行わなかったが、前倒しなり、規格外品等拡大の取り組みを、それぞれ県で行った。

オ 各委員のコメント

【チェーンストア協会】

- ・ 農林水産省から規格外品の取扱い等の要請を受けた。だが規格外品は量的に少なく、経年的に扱っている店舗は少ない。通常、規格外品を扱えるルートを確保し、消費者の皆様にもそういうものだと分かってもらうことが重要である。

【主婦連合会】

- ・ 都心のスーパーには何店舗か規格外品が並んでいた。生協などでは規格外品がカタログ上に入っている。規格外品が一般店舗でも普段から取り扱われるようになり、それに慣れることが消費者側も大切である。

【全国地域婦人団体連絡協議会】

- ・ 規格外品が消費者にとって身近になったと感じる。だが市場経由で規格外品を扱うのは難しい。また今回のように価格が高騰した場合に、元々量の少ない規格外品を対策に当てること意味がそこまであるのか。需要や天候、それまでの生育状況をもって供給予測は出来るのだから、もっと早く幹事会を開き、今後の対策について話し合う必要があるのではないか。

【藤島委員】

- ・ 需給予測は非常に難しい問題である。工業製品と違い保存ができない。そして数度の温度の変化でも生産量が全然違う。保管しておけばどんどん価値が下がってしまう。米と違って、野菜は2割3割の価格の増減が頻繁に起こる。消費者の方々には十分ご理解をいただきたい。

(2) 22年産夏秋野菜の需給・価格の見通し

ア 事務局及び全国農業協同組合連合会から夏秋野菜の需給・価格の見通しについて以下のとおり説明があった。

事務局から、資料 2-1 「野菜需給協議会幹事会（7月12日開催）の概要」

に基づき説明。

- ・ 7月12日に、はくさいの価格の著しい低下を受け急遽、持回りで幹事会を開催した。事務局から価格が低下していること、主な用途であるはくさい漬けの需要が伸びていないことなどを説明した。その上で、産地の長野県が、7月11日から市場隔離を実施し、12日から産地廃棄を実施したいという状況を説明した。
- ・ 各幹事からは、「生産者の厳しい現状や、産地廃棄の必要性は十分理解する。だが2年連続で同じ時期に産地廃棄するというのは問題。もっと需要を踏まえ計画的な生産を考えるべきではないか、消費拡大も工夫すべきではないか」等の意見があった。

【全農長野県本部】より、現地の状況について以下のとおり説明。

- ・ 現状は、良い製品までも値が付かず、コストが賄えない実態である。そのため、農家の経営を守るためには出荷を止めるしかないと判断をしたところである。
- ・ 夏はくさいについては、県行政と計画を作成し、生産の抑制を農家をお願いしてきている。
- ・ 結果として、ほぼ計画通り。作りすぎて平年よりも多く出ている状況ではないことをご理解いただきたい。

イ 委員のコメント

【全国消費者団体連絡会】

- ・ はくさいは、消費者には冬の野菜というイメージが強い。どのようにしたら夏のはくさいがおいしく食べられるかというアピールや、売り方の工夫を考えるべきである。

【全国地域婦人団体連絡協議会】

- ・ 今回、廃棄がメディアで大きく取り上げられなかったのはとても幸いである。消費者も野菜が捨てられている状況を目にするのはとても心が痛む。はくさいは、冬でも1玉を使い切るのに大変な工夫が必要である。現代のような世帯の人数が少ない中で、1玉を消費するのはなかなか難しい。

【木下理事長】

- ・ 7月8日の野菜需給・価格情報委員会の中で、現在の漬け物需要は、特にキムチの消費、あるいは生産がかなり増えている一方で、従来の伝統的な浅漬けというような漬け物の消費が減っている状況であるとの議論があった。キムチ以外の食べ方についても提案がないと、なかなか夏場の需要の落ち込みの回復は難しいとのことである。

ウ (株) ウェザーマップ江花純氏から、資料 2-4 「この春の気象の分析と今後の気象について」により、下記のとおり説明。

- ・ 今年 は 1 月 から全国的に気温の変動が大きくなった。春全体でいうと、北日本はやや低温気味、東日本と西日本も平年をやや下回った。ただ 6 月からはほとんど高温であった。この寒暖は北極振動が原因である。
- ・ 今年 の春は降水量が多く、日照時間は少ないという状況であった。これは、負の北極振動による強い寒気と、エルニーニョ現象の影響による強い暖気の間が発生する前線や低気圧によるものである。今年 の春の日本列島は前線や低気圧が通過することが多かった。現在は負の北極振動とエルニーニョ現象は終息に向かっている。
- ・ 今年 8 月がかなり低温になったとしても、6 月から 8 月を平均して冷夏になるということはない。だが、北日本にやませなどをもたらすオホーツク海高気圧が懸念される。8 月は低温の可能性は残されている。それと同時にエルニーニョ現象の反対であるラニーニャ現象の発生の可能性が強く、9 月は残暑が厳しくなりそうである。
- ・ ラニーニャ現象発生の年の秋の特徴としては、平均気温が沖縄・奄美で高く、北日本と東日本の太平洋側、そして西日本では降水量が少ない傾向にある。また日照時間は、北日本の日本海側、西日本と沖縄・奄美で少ない傾向にある。

エ 全国農業協同組合連合会から、資料 2-2 「22 年産夏秋野菜の需給・価格の見通し（概要）」により、以下のとおり説明

- ・ 「夏秋キャベツ」については、7 月の降水量が多く、この後の天候の状況によっては出荷に影響が出るのではないかと懸念される。
- ・ 「たまねぎ」については、3 月、4 月の状況から全般的に生育遅れだったが、6 月が好天だったため回復基調であると考えている。
- ・ 「夏だいこん」については、当初は生育が遅れていたが、天候が順調なため、回復傾向にあると考える。
- ・ 「秋にんじん」についても、生育が遅れていたが、今後回復傾向にあると考える。
- ・ 「夏はくさい」については、現状は潤沢な出荷であり、計画どおりであるが、非常に天候が不順ということで、今後影響が出る可能性がある。
- ・ 「夏秋レタス」についても、今後の天候の状況によって、出荷に影響が出てくる可能性があると考えられる。

オ 藤島委員から価格情報委員会座長として、資料 2-2 「22 年産夏秋野菜の需給・価格の見通し（概要）」により、今後の見通しのまとめを以下のとおり説明。

「夏秋キャベツ」について

- ・ 作付面積は微増。
- ・ 生育状況は、3～4月の天候不順の影響でやや遅れたが回復傾向。
- ・ 今後、気象が平年並に推移すれば、前年を上回る可能性が高い。
- ・ 価格は、前年より低めで推移する可能性が高い。

「たまねぎ」について

- ・ 作付面積は、全国的に前年並。
- ・ 生育状況は、北海道で1週間から10日ほど天候不順により遅れ気味であるが、回復傾向にある。
- ・ 府県産は小玉傾向にあるものの、全国的に見れば平年並の出荷が見込まれる。
- ・ 価格は、平年並と見込まれる。

「夏だいこん」について

- ・ 作付面積は、北海道を中心に微増。
- ・ 生育状況は、北海道で低温や降雨により、播種が遅れ平年より遅れているが、回復傾向。
- ・ 今後、気象が平年並に推移すれば、平年並の出荷が見込まれる。
- ・ 価格は、出荷増により前年を下回ることが見込まれる。
- ・ 連作障害による品質低下が生じていることに留意する必要がある。

「秋にんじん」について

- ・ 作付面積は、前年並。
- ・ 生育状況は、中心となる北海道で、低温や降雨により、平年より5～10日程度遅れているが、回復が見込まれる。
- ・ 今後、気象が平年並に推移すれば、お盆明け以降、出荷量が増える可能性がある。
- ・ 需要面では、加工用の需要が増加することが見込まれる。
- ・ 価格は、7～8月中頃までは、堅調に推移するものと見込まれるが、お盆明け以降、特に9月に入り、厳しい状況となることが見込まれる。

「夏はくさい」について

- ・ 夏はくさいの需要のほとんどがつけもの加工用であり、つけもの需要が減少する中で、作付面積は、減少傾向にあるものの、生育状況の遅れが回復していることもあいまって、出荷量は前年並、特に9月には平年並にまで回復することが見込まれる。
- ・ 価格は高くても前年並であり、前年を下回ることも見込まれる。
- ・ 今後は、加工用・業務用の需要に対応した需給バランスの確保（生産計画）がより一層重要となる。

「夏秋レタス」について

- ・ 作付面積は、前年並。
- ・ 生育状況は、遅れていた長野県は回復し、順調。
- ・ 今後、気象が平年並に推移すれば、出荷量は回復し前年を上回り、平年並の出荷が見込まれる。
- ・ 価格は、8月は前年を下回るものの、9月以降は前年を上回る可能性がある。

カ 事務局から、追加資料により、価格が高騰しているほうれんそうとねぎについて以下のとおり説明。

- ・ 「ほうれんそう」については、冬の旬の食材のため、夏は高くなる傾向にある。
- ・ 産地の岩手では、7月の雨により生育が遅れている状況。しかし、夏場は播種から1ヶ月程度で収穫出来るので、今後の天候次第である。
- ・ 「ねぎ」については前年と大きな違いはない。
- ・ 産地の茨城では、気温も少し高めであり、雨が少なかった。夏場のねぎは露地栽培のものになり、4月の冷え込みによる生育遅れは回復している。
- ・ 出荷が遅れているのは、雨で圃場に入れないため、収穫が遅れているため。梅雨明け以降は、出荷量自体は平年並になるのではないかとと思われる。

(3) 野菜消費拡大に向けた協議会の取組について

ア 各団体委員から、資料3-1により、野菜消費拡大に向けたそれぞれの取組を以下のとおり説明。

【日本栄養士会】

- ・ 8月31日に「野菜を食べよう-メタボ撲滅-シンポジウム」を開催予定。

【青果物健康推進協会】

- ・ 8月28日に、ららぽーとTOKYO-BAYでイベントを開催する。
- ・ 8月1日に、テレビ東京系の「ソロモン流」という番組で、食育の取組の様子が放映される。
- ・ 小学校の給食に、急きょ長野県はくさいを使用してもらうことになった。その全校児童の父兄に対して、はくさいの無償配付も実施予定。
- ・ 「野菜がおいしゅうございます認定制度」をスタートし、野菜がたくさん食べられる外食店舗を認定する事業を開始している。

【野菜と文化のフォーラム】

- ・ 8月1日に開催されるごはんミュージアムの中で、「日本全国なす自慢！なすとご飯のおいしい関係」というイベントを行う予定。

【農林水産省】

- ・ 7月から9月にかけて「夏ベジプロジェクト2010」を推進していく予定。

イ 事務局から、資料3-2「消費拡大に向けた野菜需給協議会ホームページ（案）」により、以下のとおり説明。

- ・ 会員の相互の情報共有、消費者への情報発信のため、団体名簿、協議会や幹事会の案内、セミナーの概要等、様々なリンクを貼っていきたいと考える。更新は随時行い内容の充実を図る。

ウ 委員のコメント

【スーパーマーケット協会】

- ・ 夏は季節の野菜というものがある。年間をとおしても売れているが、トマトなどサラダ材料が非常によく売れる。またカット野菜の売り上げが伸びており、消費者の生活の中でかなり浸透してきた。

【全日本漬物協同組合連合会】

- ・ 最近の漬け物需要は、浅漬けとキムチが5割から6割を占めている。その中の3割はキムチであると見ている。ただ夏場は漬け物の需要は落ちる傾向にある。全体的に漬け物需要は減っており、漬け物離れが始まっており、その対策を考えている。

(4) その他

ア 事務局より、資料4-1「平成22年度野菜セミナーについて」、資料4-2「野菜需給協議会現地協議会のご案内」により、以下のとおり説明。

- ・ 7月28日に第2回野菜セミナーを開催予定。前回のセミナーで要望の大きかった「植物工場の野菜」をテーマに開催する。
- ・ 9月2日に野菜需給協議会現地協議会を行う予定。協議会会員と野菜産地に赴き、現地の生産者と直接意見交換を行い、野菜生産の実態を実感するというものである。行き先は、長野県南佐久地方を予定。

イ 全体をとおして委員からのコメント

【全国農業協同組合中央会】

- ・ 参考資料4「野菜の輸入量と国産野菜の卸売価格との関係」の説明が欲しい。
- ・ A L I Cでは小売価格の実態調査を行っているが、これは卸売価格と並べて連動性を検証した方がよい。我々にとっては卸売価格が大事だが、消費者にとっては小売価格が大事である。

ウ 事務局より、参考資料4「野菜の輸入量と国産野菜の卸売価格との関係」について、以下のとおり説明。

- ・ この資料は、卸売価格と輸入量の関係が品目によって違い、それがなぜ起こるかを検証したもの。
- ・ 「たまねぎ」については、ホクレンのたまねぎが10月位に収穫の見通しがつくため、かなり早い時期から輸入の手当が出来る。また6月は水分を多く含む新玉ねぎの時期であるため、品質の安定している外国産で対応している。また中国では沿岸地区に冷蔵施設が整備されているため、船便でも2日で日本に輸入される。これらが、グラフが平行に動く要因である。
- ・ 「にんじん」については、国内の事情が大きく関わる。千葉や徳島等の主産地の代替産地がなく、それぞれの産地が不足のときにはスポット買いをする。ただスポット買いは実際に入荷するのに2週間位の時間が必要であり、時として、国内価格が下がり輸入が入ってくるということがあり得る。
- ・ 「ねぎ」については、元々日本で売っている白い部分が多いねぎは中国では食べられていない。日本の商社が日本に輸出すべく中国に持ち込んだもの。国内では、輸入と国産を使うユーザーがはっきり分かれている。国内産ねぎは不足をしても他の代替産地で手当できる。これが、国内価格がどうあっても、輸入量が変わらない要因である。

最後に座長より本日の議論を踏まえ、野菜の需給状況の周知や消費拡大に努めていくよう関係者の方々にも取組をお願いする旨の発言があり、また事務局より、次回の協議会は秋冬野菜の作付動向がある程度判明する11月中旬頃に開催予定との説明があり、閉会となった。